平成28年度　新収蔵書作品紹介

当館では、市民の芸術文化振興を図るため、新潟市北区にゆかりの深い作家の作品を収集･公開しています。
今年度は、新潟市内外の所蔵家からのご寄贈により4点の書作品を収蔵しましたので紹介します。

【書作品】

上田桑鳩（1899―1968）

「建寧」　墨・紙、34.3×69.5㎝、額装

弦巻松蔭（1906―1995）

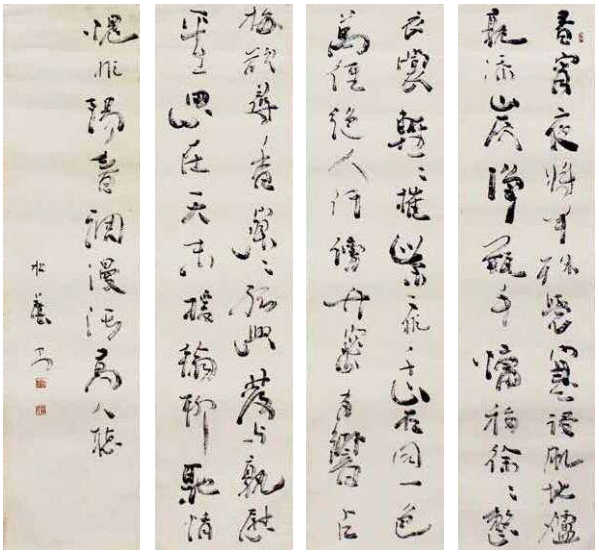
「頼山陽詩」1934年、墨・紙、137×43cm

・1936年から1945年まで在京して上田桑鳩のもとで学んだ弦巻松蔭が、上京前、葛塚地域の書道研究会「入木会」主催の入木会展に出品した作品と考えられます。葛塚で学書に励んでいた当時の貴重な資料です。

「良寛詩」　1954-56年頃、墨・紙、135.5×34cm×4幅（図版）

・弦巻松蔭が日展に出品していた時期（1953-57）の作品と考えられます。日展出品作品は、松蔭自身が後年、処分したと言われているので、この時期の作風を留めた作品は、現時点でこの1点だけしか見つかっていません。

「円満」　墨・紙、96.0×114.5cm、衝立
（形状寸法　144.5×168.2×47.8cm）



展覧会報告

上田桑鳩展　書の新時代を切り拓いた芸術家

出品作品

上田桑鳩　書27点、絵画4点、臨書6点
弦巻松蔭　書4点

展覧会図録

図版42点　30頁
論考、年表、目録等　モノクロ　26頁

論考執筆
野中吟雪氏「上田桑鳩の仕事」（新潟大学名誉教授・岐阜女子大学大学院教授・書家）
神田直子「上田桑鳩の思想と芸術」
伊豆名皓美「上田桑鳩の臨書論の実践と啓蒙」

企画担当

神田直子・伊豆名皓美

上田桑鳩(1899-1968、兵庫県生まれ)は、昭和初期から戦後の復興期にかけての激動の時代のさなかで、漢字文化圏に固有の「書」を、「芸術」という世界の舞台に押し上げることに尽力した書家であり、思想家です。

桑鳩は、1927（昭和2）年、28歳で上京して二松學舍で古典を学んだ後、書法の近代化を進める比田井天来に入門します。技術を磨き、研究を深めた桑鳩は、書表現のさらなる革新を志し、1933（昭和8）年、西洋の近代芸術論を援用して、書は「芸術」、つまり一人の人間（精神）による創造的な営みであることを宣言しました。

戦後の自由な時勢のなかで、桑鳩が実践したのは「文字（言葉）を書く」ことを「書」の本質と見きわめ、それを前提として、「書とはなにか」を探求することでした。「何という字を書くか」ではなく、「何を表現するのか」、「作品は何を表し示すのか」。こうした問いに対する桑鳩自身の解答を、自らの作品によって提示したのです。桑鳩は、旺盛な制作活動と並行して、雑誌『書の美』の活動、「奎星会」を母体とした全国公募展開催など、新しい時代の書芸術の振興と普及のために全国を奔走します。桑鳩にとって新潟は、帰郷した門弟弦巻松蔭の存在により、主要な拠点の一つとなりました。

この展覧会は、当館所蔵品を含め、新潟に伝わる作品を手がかりに、書表現の新たな可能性を探求した上田桑鳩の芸術と思想を浮き彫りにする取り組みとして企画し、開催しました。

（神田直子）